

第一話

母子石 ははこいし



むかし、母子ははこさわ沢って呼んでね、その沢の下が沼になってて、その沼どこに石があんだよ。
その石に、足跡が二つ、ついてんだおんね。お母がつつあんと、その娘の足跡ね。

今から千三百年程ほど前のことだったと。

塩釜村石堂にね、親子三人で暮らしている家族があって、仲のいい、明るい家族だったんだと。

ところが、多賀城の城を築く時、人柱がいるからってね、白羽の矢って矢を作って、それを射て矢が落ちたところの家の人が人柱になることになったんだと。

そして、白羽の矢が飛んでって、その家さ落ちたんだと。

そんで、その家の主人が、ほれ、人柱にされることになったのじゃ。

人柱にされる日が来てね、とうとう、その家の主人が城さ連れていかれたんだと。

その時、お母がつつあんと娘が、城さ連れていかれる親父おやんつつあんと

を送ってきたんだと。そして、そこにあった石の上さ登って、ずっと親父おやんつつあんどこ、姿が見えなくなるまで見送って、立っていたんだと。

そして、夜になっても動かなかったんだと。次の日になっても、またその次の日になっても、石の上に立って動かねえんだと。

二人して、抱き合ってたねえ、親父おやんつつあんが連れていかれた方を見て立っているんだと。

親父おやんつつあんどこ恋しくて、恋しくて、ずっと立っているんだと。そうしてるうちに、そこさ抱き合ってたまんま、二人とも死んでいたんだと。

可哀そうに思って、みんなでその亡骸、ねんごろに葬ってやったけども、立ってたどこの石には、二人の足跡がそっくりと残って、いつまでも消えねえんだと。

今も、残っているんだよ。それを「母子石ははこいし」と呼んで、可哀そうな母子ははこのことをしのんでいるんだよ。

これは後からの話だけども、塩釜のある酒屋で、その石の姿がなんとも美しいんで、庭石にしようと思って持っていったんだと。

したらね、夜になるとなんだつうことなくその石が動くんだと。唸ったり、泣いたりして、とっってもおっかなくて、また担いでいって、もとの場所さ返したつうんだね。